

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 折口信夫『死者の書』の「語り」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 直之, Ogawa, Naoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000118

折口信夫『死者の書』の「語り」

小川直之

折口自身による『死者の書』の解題ともいえる「山越しの阿弥陀像の画因」では、『死者の書』は、藤原横佩朝臣家の姉姫の神仕えを描いた未完の「神の嫁」(大正十一年)の書き換えに、大津皇子の惨死を滋賀津彦の死と蘇りとして加え、さらに前文に「穆天子傳」の盛姫の死と葬儀を記すことで、「倭・漢・洋の死者の書の赴き」を出した。そしてこの作品は「近代観に映じた、ある時期の古代生活とでもいふもので」、それは「山越しの阿弥陀像や、彼岸中日の日想観の風習が、日本固有のものとして、深く仏者の懐に採り入れられて来たことが、ちつとでも訣つて貰へれば」と考えたものと説明している。

「神の嫁」は、実像としても感得した沖繩、久高島のノロの結婚やイサイホーにみる神女として女性の姿を下敷きとした女人司祭の姿であり、山越に光り来臨する阿弥陀像や日想観は、折口が初期の民俗論述で説く太陽神信仰と常世論の延長線上にあると思われる。山の端に輝き現れる阿弥陀像や没日西方の浄土観は、奈良時代という「近代観」によって再編された、これ以前からの太陽神信仰や常世観の持続の姿であるというのであろう。

こうした自著自注は、中村真一郎の『死者の書』評とも重なる部分がある。中村は、同書を「人間」を捉えるのに、その日常的意識だけでなく、深層心理に照明を与え、「小説全体が民俗学から導き出された共同体がもつ「集合意識の流れとして描かれている」。また、小説のなかでは「悪鬼や妖精が生命あるものとして、現実に生きて動いている」とともに、家持と仲麻呂との対話は「政治と文学との見事な対話」で、「一時代の文明を再現しようとする歴史小説、あるいは文明小説である」(『死者の書』私観「折口信夫全集月報」第二四号、昭和四二年一〇月)と評している。

「山越しの阿弥陀像の画因」での『死者の書』の説明や中村の『死者の書』評は、見方を換えれば、古代人の思惟世界に対する折口の理解表現である学術研究と芸芸創作との関係性への言及ともなっている。折口のなかでは両者が「折口信夫」と「釋道空」で切り分けられていても、互いに密接に結びついていることは、昭和十二年の「琉球国王の出自」と昭和十三年の「月しろの旗―藩王第一世尚氏父子琉球入りの歌」を見ても明らかである。

このことは従来から指摘されているが、『死者の書』でさらに加えなければならぬのは、この書が全編を通じて語り芸という声の世界をもつことである。松浦寿輝は『折口信夫論』の中で単行本『死者の書』の冒頭部の文体を取り上げて、「何か人を不安にさせる主客未分化の「古代性」が感知され、それは「語り手の視点の位置が絶えず攪乱され、言葉がどこから発せられているのかわからない」からで、このことから『死者の書』は「音」と「声」の小説である」と評している。これは松浦ならではの指摘と評価できるが、この文体は文字テキストではなく浄瑠璃のような「語り」であり、自ずとそこには「語り分け」があつて、主客はその声音によつて観客が感知するという手法ではなからうか。折口は幼少期から道頓堀の劇場に通い、芸能の感性と作法は身に染みていたと思われる。同じく松浦が取り上げる弟子が講義をする際にを行った折口の口述の教えも、芸能がもつ声と動作の身体教授法である。作品中で當麻語部の姥を登場させ、重要な役割を与えるのは、中村がいう「文明の再現」だけではなく、語り芸のなかの特化された「語り」である。『死者の書』には音と声に加えて色彩の世界もあり、こうした舞台から導かれた表現が、川本喜八郎監督の人形アニメ「死者の書」、木野彩子（鳥取大学）らによる舞踏「死者の書 再読」、近藤ようこの漫画「死者の書」、今藤政太郎らによる新作邦楽「死者の書」など、身体や音、映像へと誘う強い力になっていると思う。劇作家の加藤道夫が『死者の書』に強く惹かれたのも、ここにあったのではなからうか。

折口自身は、亡くなる直前の昭和二十八年八月半ばに、遺稿となった「遠東死者之書」と中途で終わる「都鄙死者之書」を箱根叢隠居で書いている。ともに「死者の書」であり、このこだわりは何によるのか、『死者の書』には考えなければならぬ課題が多い。

（日本民俗学／折口信夫研究）